

かゝるものあきなひて、よにふる人いかならんといひてなきければ、ともの人ばなほおほかたのよを哀がるとなん思ける。かくてこのあしの男に、ものなぞくはせよ、物いとおほくあしのあたひにとらせよといひければ、すゝろなるものになにかものおほく給はんなど、ある人々いひければ、去つてもえいひにく、て、いかで物をとらせんとおもふ間に、去つたそれのはさまのあきたるより、この男まれば、わがめににたり、あやしさに心をさめて見るに、かほもこゑもそれなりけりと思ふに、おもひあはせて、わがさまのいといらなく成たるを、おもひはかるに、いとはしたなくて、あしもうちすて、はしりにげにけり、去ばしといはせけれど、人の家になげ入て、かまの去りへにかゝまりおりけり、この車よりなほこのをとこたづねてゐて、こといひければ、ともの人、手をあかちてもとめさはぎけり、人そこなる家になん侍けるといへば、此おとこにかくおほせ事ありてめすなり、なにのうちひかせ給へきにもあらず、ものをこそは給はせんとすれ、おさなきものなりといふとき、に硯をこひてふみかく、それに

きみなくてあしかりけりと思にもいと、なにはの浦ぞすみうき、とかきてふむして、これを御車に奉れといひければ、あやしと思ひてもてきて奉る、あけて見るにかなしき事ものにならず、よ、とぞなきける、さてかへしはいかゝ去たりけん去らず、くるまにきたりける衣ぬぎて、つゝみてふみなどかきぐしてやりける、さてなむかへりける、のちにはいかゝなりにけん去らず、あしからじとてこそ人のわかれけめなにか難波の浦は住うき

〔更科日記〕むらさき生ときく野も、あし萩のみたかくおひて、馬にのりてゆみもたるすゑ見えぬまで、たかく生ひ去りて、中をわけ行に、たけしばといふ寺あり、

〔新千載和歌集〕正治二年後鳥羽院に、百首の歌奉りける時、後京極攝政前太政大臣霜枯のこやのやへふきふきかへて、蘆の若葉に春風ぞ吹